

日本記者クラブ会報

第109号
1979年
3月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
社団法人 日本記者クラブ 発行
電話五〇三二七二二(代)

現実的なモフタル・インドネシア外相

創刊百年で『朝日』から百万円の寄贈

国会再開で、政界からのゲストを
求めることが困難だったこともあつ
て、二月のクラブ行事は閑散だった。



モフタル外相と梅本企画委員(司会)

まず、春闘を迎えての「集中勉強
会」の最初の講師として労働省事務
次官の北川俊夫氏を招いての講演会
が八日午後行われた。北川次官は、
雇用、賃金の現状を明快に分析。講
演はこの勉強会にのぞむ総論として
役立つ内容のものだった。

外務省賓客として来日したモフタ
ル・インドネシア外相の記者会見は
二十三日夕刻行われたが、外相は国
際法学者から政治家に転じた人で、
ASEAN諸国指導者の中でも理論
家として知られる人物だけに、中越
紛争など激動するアジアの中のイ
ンドネシアの立場を述べたが、出席
者も約六十名に上る盛会だった。

クラブの五十四年度予算をきめる

第十一回臨時総会は三月二十二日に
開かれる予定だが、予算の原案が二
十八日の総務委員会で採択された。

この予算規模は約一億五、四二一
万円で五十三年度に比して約七〇四
万円(四・八%)の微増となった。理
事会は、できるだけ会費値上げを避
ける方針であり、今年八月からプレ
スセンターのクラブルームに対する
賃料引上げが予定されているにも拘
らず、他の支出を極力押えた内容と
なった。

朝日新聞社は今年創刊百年を迎え
るが、これを記念するためクラブに
対して百万円を寄せられた。クラブ
では三月七日の理事会にはかって、
これを有難くお受けし、クラブ賞基
金に繰り入れる予定だ。最初千葉雄
次郎会員が寄付された百万円で発足
したクラブ賞基金は、その後読売新
聞社の創刊百年を記念しての寄付そ
の他に今回の朝日新聞社からの百万
円を加え総額約四百四十万円となつ

た。

二月からクラブ・レストランのメ
ニューが変わった。従来のメニュー
は品数が少なかつたため、クラブ員
がお客を接待する場合などに不便を
おかけしていたが、こんどのメニ
ューでは十四品目をふやした。値段は
アラスカの協力で、ほとんど据置き、
中には安くなったものもある。また、
膳写版ずりの「今日のメニュー」は
別として、いわゆる「グランド・メニ
ュー」にはお客用のものを作った。
この方には値段がはいっていない。
クラブ員がお客を伴ってレストラ
ンに来た時、クラブ員には値段のは
いったもの、ビジターには値段のな
いメニューを出すようにしている。
ウエーターが気がつかない場合もあ
るから、お客接待の場合、「ビジタ
ー用のメニューを……」と注意して
いただくとうれしい。

三月一日現在の会員状況

法人会員	一四二社
基本会員	六一一人
個人会員	七五七人
法人・個人賛助会員	三八社 一一五人
特別賛助会員	五一人
名誉会員	七人
計	一八〇社 一、五四一人

シリーズ研究会

変化の激しい時代の中で
日本記者クラブは十才の誕
生日を迎えようとしている。
諸先輩、藤本事務局長
以下のご努力で最新鋭の施
設が整えられ、賓客・V I
Pを迎えるの会見は定例行
事化した。

ナショナル・プレス・ク
ラブとしての地位は確立さ
れたと言えよう。

問題は、今後どのようにソフトウ
ェアを充実させていくかであろう。

さきの企画委員会では、シリーズ
物をもっと手がけようという話が出
て「アジア新時代」ととりくむこと
になった。

委員会討議の内容をご紹介しますと
次のようになる。

◇
◇
A 「最近のアジアはめまぐるしい
ね。米中国交正常化、イラン、カン
ボジア、中越紛争と大事件が次々と
起こっている」

B 「地域的基礎知識を充電する勉
強会を催そうか」

C 「ニュースのない所に中堅・若
手記者は寄ってこないからテーマ主
義で行こう。月に一本、年に十二本
のテーマをたてて」

D 「アジアは多様だし、色々立場
があって、誰か一人名將を呼んでく
れば、事成れりというわけにいか
ない。十二回では不足だし……」

討論によって内容を深めていく手法
をとるのが良いと思う」

G 「産業構造シリーズは、充実し
た講師陣と内容が売物になった。出
版も予定している。アジアシリーズ
はどうだろうか」

H 「日本資本主義の建設には百数
十年の歳月と巨大なエネルギーが費

「アジア新時代」始まる

討論を重視し、基礎知識充電も

企画委員 高野 洋

E 「十二回で全部を尽す考え方で
なく、ニュースの流れをうけとめな
がら、基礎知識を充電する実戦に即
したやり方で良い。会員の要望が強
ければ、延長戦を試みよう」

F 「講師だが、各社には特派員経
験者が豊富にいる。テーマによつて
は、そういう会員に報告して貰い、

やされた。それに比べると国際問題
のとりくみは浅い。その上活字を
前提にすると、微妙で卒直な話が展
開できないこともある。突っこん
だ内容を売物にしよう」

I 「とにかく一つのクラブにつめ
ていてはカバーし得ない広汎なテ
マが想定されるね」

◇
◇
以上のような委員会討議を経て
「アジア新時代」が登場することに
なった。

さし当てるの予定は、すでにお知
らせましたように、二月、朝鮮、三月、
中国、四月、南北問題である。

この他、S A L T II、アジアの共
産党、地域紛争、日米関係等々のテ
ーマが数限りなく浮んでくる。

難かしいのは、誰を講師として招
き、テーマをどう切るかである。一
回最大二時間の予定の中でどれだけ
実のある会にできるか？

この企画について会員諸賢のお知
恵を借り、またご要望があれば、で
きるだけ、それにしよう努力して
いきたい。葉書きでご注文を事務局
にお寄せ頂ければ、早速、委員会
検討に付します。

よろしくご協力下さい。

担当委員 柴田俊治(朝日)、石丸
和人(毎日)、安田志郎(読売)、田
久保忠衛(時事)、高野洋(NHK)



これが国後・ソ連基地

「これが国後島のソ連基地」。サンケイ新聞（二月五日付朝刊）の一面を飾った写真は防衛庁担当の牛場昭彦記者との会話がきっかけだった。「国後にソ連が基地をつくったらしい」。

さっそく写真部で話題になった。「よし、モノにしよう」一月中旬のことである。国後は日本固有の領土ではあるが、現実にはソ連が支配している。どこまで近づけるか。オホーツク海からの雲は厚く、風も強い。雪はどうか。調べてみると、視界は一月末から二月にかけてがいらいらしい。知床半島の上空五、〇〇〇メートルなら撮影も可能だろう。四〇〇ミリと八〇〇ミリの望遠レンズをかついで、本社機「おぞら」で羽田を飛び立ったのは一月二十四日。パイロット二人に整備士一人、それに私の四人である。そして、帯広空港でチャンスを持った。第一の難問は天候だった。毎日毎日、イライラしながらの天候待ち。晴れ間が出たという日には、エンジンが凍りついて動かなかった。数個のカイロをガムテープでエンジンの周囲に張りつけ、自動車のオイルヒーターをタンクに差し込み、夜を徹してエンジンとオイルを温めつづけた。また、天気予報がアテにならない。知床は猛吹雪の連続という予報を最初は信じていたが、ために、知床半

島に点在する警察や消防に片っぱしから電話を入れてみた。「きょうはそこから国後が見えますか」。二十五キロ〜三十キロの距離だから肉眼で国後が見えれば撮影できる。

十日目の二月二日。朝の予報では、まとも一日中吹雪。念のために羅臼のダイヤルを回すと「今日は良く見えます」。それ出撃だ。標津の上空で雲が切れ、国後島が姿を見せた。ところが思わぬアクシデントが起きた。わがセスナ機は上昇限度六、五〇〇メートル。だが、五、三〇〇メートルに達し計器が気温マイナス三五度を示したとたん、機内ヒーターが切れた。しかも撮影には窓を開けねばならない。

窓から吹き込む気流が機体をもみ、八〇〇ミリ望遠の使用を不能にした。やむなく四〇〇ミリレンズでシャッターを切り続けた。手袋なんかはめていられない。指先がちぎれるほど痛い。鈍く光っているのびる三、五〇〇メートル級の滑走路、兵舎らしいカマボコ型の建物、レーダー基地に建った大型のドーム……。

その直後、黒い滑走路のあたりに、キラッ、キラッと光るものが動き出したとたん、ぐんぐん上昇しはじめた。その光るものは、どんどん近づいてくる。「スクランブルだ」。私たちは、機首を急旋回、

知床に向けて一目散に逃げた。

サンケイ新聞に掲載された写真は、外務省の腰を上げさせ、国会で論議され、そして共同通信、AP、UPI、中国通信を通して世界中に配信された。

サンケイ新聞に入社して二十年、カメラを片手に現場から現場への生活だったが、正直いって、これほど話題になった写真はない。スクープとはいえず、私には複雑な気持ちだった。オレじゃなくても、撮れた写真じゃないか。現場があれば、とんで行って撮るのがカメラマンの仕事、要はシャッターチャンス。最近ではカメラが進歩し、チャンスさえあれば、子どもでも特ダネ写真が撮れる。カメラマンだからといって、のんびりしていられない時代である。

だが、私たちは、さまざまな情報にたえず接触できる立場にある。現場があればいつでも飛び出せる。そのチャンスはどう生かすか、ということである。この一枚の写真は、コロンブスという、ニワトリが生んだ一個のタマゴであるのではないだろうか。

菊本 寛

（サンケイ新聞写真報道室）

経済、科学を中心に



初めて来日したときは留學生としてでした。法政大学で二年間勉強したので

す。下宿は阿佐ヶ谷でした。当時は静かなところでした。なつかしく訪ねたことがあるのですが、変わってしまっていて、下宿はなく、ビルが建っていましたよ。

その後、一九六四年に第一回の日中記者交換の際、特派員として再来日。今度で二度目の東京特派員ですが、この間に三度ほど訪日代表团に同行して日本を訪れました。そのため、東京だけでなく地方のことも勉強できました。

中国での取材は農村や工場へ行って、そこの人たちの活動を紹介することです。日本でみられるような記者会見はこれまでありませんでしたが、鄧小平副総理のクラブでの会見の後、こうした形の会見が中国でも行われるようになっていきます。

記者会見はいいですね。いろいろな国や人の政策や意見を理解するのに便利な方法です。

東京での仕事は訪日代表团と日本の人

たちの交流を報道すること。それから、国家の基本政策、特に外交政策の取材です。それに中日経済協力関係ですね。

昨年、経団連の土光さんと新日鉄の稲山さんにインタビューしました。これは人民日報で報道されました。

いまのところこうしたインタビューは、経済関係の人たちや科学関係の人たちが主です。

グラマン事件は、私たちの国では考えられないことで、興味ありませんね。

丁拓 新華社の駐日首席記者。59才。

北京に新華社につとめる夫人と二人のお子さん。下のお嬢さん(21才)が今度職場を離れて大学へ入った。

ちょっと官僚的なのところも



日本はとも取材しやす

とえば、大平さんでも「会いたい」と電話をすれば、時間を取ってくれて会える。でも、日本の政治家や経済界の指導者の方がたは記者のインタビューになれているんですね。インタビューの時間のほとん

どを使って、ご自分の主張を展開する。

だいぶ前のことですが、日本の消防システムの実態をレポートしようとしたことがあります。消防署へ行きまして、コンピューターとか署内のいろんな設備や装置は喜んで見せてくれるわけです。

でも、出動の際に一緒にハシゴ車にちょっとのせてほしいと言ったら、グノー、なんですね。もし一緒に来て取材するのなら、自分の車で追いかけてはいいけない、というわけです。規則なんですよ、機構や組織の末端の人たちほど官僚的なのです。もちろん、私たちのところにも官僚主義はありますが……。

また、こんなこともありました。世界の主要国で麻薬問題が深刻なので、東京の実態と捜査などを取材したい、とフォリン・プレスセンターを通じて頼んだら、警察の人が言ったのかどうかわからないんですが、「日本ではそんなものはない」とにべもなく断られました。これも官僚的だと思います。

でもとにかく、日本は自由で取材しやすいところですよ。特派員は私ひとりです。からたいへんなこともあります。かえってやりがいもあり、楽しいですよ。

スタニスラフ・レフチェンコ 発行部数七〇万冊のモスクワ「ニュー・タイムズ」の特派員。37才。単身赴任。同誌

第55回企画委員会

昭和54年1月18日(木)
日本記者クラブ大会議室

出席 藤村委員長。石丸、安田、加野、広瀬、平田、田久保、高野、梅本、渡辺、今井、鈴木、山田、林の各委員。

第56回企画委員会

昭和54年2月15日(木)
日本記者クラブ小会議室

林委員から「春闘」集中勉強会について、北川労働次官につづいて、天池同盟会長、富塚総評事務局長、金子日本貸金研究センター所長から話をきいてはとの提案があり、これを了承。

高野委員から、今年のシリーズ研究としての『アジア新時代』実施案について説明があり、検討した結果、小委員会案どおり2月に朝鮮、3月に中国、4月に南北問題という順序で、おりおりの情勢をみながら進め

は八か国語に訳されているウィークリー・マガジン。来日して四年。学生時代から日本の文化に興味をもち、最近は一万葉集」の山上憶良の歌のロシア語訳にとり組んだ。

アジア政策に関心



時々感じることは、日本人記者と外国人記者のスキップが足りないということ。霞クラブや経団連のクラブでも、ひざをまじえて……とはなかなかいかな

また、偉い人、鄧小平さんみたいな人の記者会見の時は、いつのまにか質問が決められちゃって……二〇〇人も

私は経済関係の記事を送る時でも、その中に日本人の心を紹介したいと思っ

る。

最近では子供の自殺が話題になっているようですが、競争とストレスの多い社会ですね。塾、学校と子供たちにストレスがたまるといような段階もの仕組が日本にはたくさんある。子供の世界だけでなく大人の世界でもそうです。宴会があるとその後二次会、三次会と段階がある。そして、こういう段階の後、結局、信用のある者同士だけが残るとい感じ。すごく日本的ですね。

今、興味のあるのはやはり対中、対ベトナムなどの日本のアジア政策。

それから公害とエネルギー問題。しかし、日本は狭い国の中でよく世界中のためにいろんなものをつくってくれますね。でも、気にしているのはスピードばかり。回教の言葉に「急ぐのは悪魔のやり方」というのがあります。ゆっくり動けば悪い面も少なく動くだけで済むのに、日本人は急いでばかりいる。何でもゆっくりがいいですよ……。

ウマル・カーン パキスタンの「ニュータイムズ」と「サウジ・ニューズ・エージェンシー」の代表として活躍。44才。来日八年目。数少ないイスラム圏からの特派員。東大留学時代知りあった医学博士の奥さんと鎌倉のマンション住まい。

予測のむずかしい社会



東京は自由で取材しやすい。私のところは経済専門紙ですが、東京は取材源としてとてもおもしろいところですね。

ただ、外務省、大蔵省、経企庁などは取材しやすいけど、法務、運輸、農林の各省はむずかしい時がありますね。

また、大きな商社は親切に取材に応じてくれるけど、二部上場などの小さな会社の取材はたいへんです。私の社の名前も知らないし、なかなかいい顔をして迎えてくれません。

今、興味のあるのは日本の経常収支赤字幅問題や、産業構造、日中貿易などで

また、日本の東南アジアへの援助政策にも興味ありますね。

日本の社会は予測しにくいですね。大平さんの総裁選勝利にはほんとにびっくりしました。グラマン事件も、外人にはわかりにくいですね。

エドワード・ラチーカ 「ザ・アジア・ウォール・ストリート・ジャーナル」の

ることを決定した。

藤村委員長から、クラブの10周年記念パネル・ディスカッションのパネラーとして、「フアー・イースタン・エコノミック・レビュー」のデ

解が得られたことが報告された。
出席 藤村委員長。石丸、安田、田久保、高野、常盤、河野、林、池浦の各委員。

第23回会員資格委員会

昭和54年1月18日(木)
日本記者クラブ応接室

出席 小林委員長。山本、下田、増田、家城、笠置の各委員。

第24回会員資格委員会

昭和54年2月15日(木)
日本記者クラブ小会議室

出席 小林委員長。山本、下田、増田、笠置の各委員。

東京特派員。フィリピン生れ。46才。来日して七年。同誌は発行部数一万五千。東南アジアを中心にした経済紙。まじめさとねばり強い取材態度は定評のあるところ。七六年、「デブス・ニュース」から現職へ。

わからない「一家心中」



一般的に言えれば日本は取材しやすい国。が、その日のうちに送らなければ何の価値もなくなってしまうようなニュースの取材の時は困ることがある。

というのは、外務省、官邸での記者会見には参加できるが、出先クラブの多くの会見は外国人特派員を入れていないので……。後で特集記事として送るならともかく、毎日、毎日の取材では不便を感じるがあります。

最近一番興味をもっているのは自殺と老後生活の問題。調べてみたんですが、青少年の自殺は昔から多かったようですね。でも私の興味のあるのは「心中」。恋人同士の心中ではなく、いわゆる一家心中です。去年、一家九人が嫁に行った娘までが、一緒に心中した事件がありま

した。あれなど、どうしてそこまで……と思っちゃいますね。日本的というのでしょうか。

今まで一番印象に残っているのは横井さんの事件に関する送稿。解説記事を送ったのですが、日本人の精神的エネルギー源は、勝たなくてはいけない、ということにあるということを書いたわけです。その裏を返せば、負けてはいけません。絶対に負けてはいけません、ということでしょう。横井さんの事件はまさにそれを反映したもののように思います。

サム・ジェームソン 「ロスアンゼルス・タイムズ」東京特派員。42才。来日して十八年。アシスタントの日本人女性が悲鳴をあげるほどの仕事人間。受付でのサインも上手なカタカナ書き。クラブの企画委員。

イラン危機対応に関心



取材で一番不便を感じるのは、外通は各省のクラブのメンバーになれないため、情報を得るのに遅れをとってしまうことです。時事や共同の情報を頼るわけ

ですが……。

今、一番興味があるのは日本経済のイラン危機への対応ですね。グラマンは私たちにとってはまったく興味なしです。

いままでのジャーナリスト生活の中で忘れられないのは、一九四九年に香港国境近くの町で共産ゲリラ司令官とのインタビューに成功した時のことです。

共産ゲリラが shanchun を無血占領するのと同じくして、私は香港側からその町へ入ったのです。記者は私、二人。ゲリラに捕えられる恐れもありました。

が、幸い、インタビューが実現したので、そのインタビューで、司令官は「国境の向こう、英領香港へは侵入しない」と言明したのです。「ヤッタ」と思いましたね。共産ゲリラが香港へ侵入するのではないかと、当時考えられていたので、大スクープした。

ピエール・ブリザール AFP日本・韓国総局長。61才。来日九年。昨年の予想アンケートで外人記者でただ一人最高点。

現在、クラブに入会している外人記者は二三名です。言葉の障害が大きいです。言葉主義で頑張っている人たちがばかりです。会員の皆さんも応援して下さい。

予算総会

新年度予算を議題に、第11回総会を3月22日(木)午後3時、クラブ記者会見室で行います。

「春闘」集中勉強会

「どうなる労働・雇用情勢」をテーマに、前回の北川労働次官について左記の方がたにお話をうかがいます。

天池清次同盟会長(3月19日(月))

2時V 富塚三夫総評事務局長(3月20日(火))

2時V 金子美雄日本賃金研究センター所長(3月26日(月))

2時V

寄贈書

続 経済のわかる本

今 静行

剣が峰のアメリカ経済

ジョージ・シモン・ローン/蓮見博昭監訳

計報 河津寅雄会員(テレビ熊本)

が、二月二日(金)、肺炎胸のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

一九七九年一月二〇日（土）昼食会

新年度予算の基本的性格

金子 一平

（大蔵大臣）

きょうは、財政、経済の運営に当たって基本的にどういう考え方を取っているのか、という問題意識のよきなことと、こんどの予算編成に当たっての私どもの基本的姿勢というようなことを中心にお話したいと思えます。

財政運営に当たっての基本的な問題点ですが、石油ショック以来、たいへん困難な状況を通り越して今日に至っているといえます。しかし、考えようによっては、私は、日本が世界で一番うまくやった国ではないか、とも思えます。

私どもが目標としていきますのは、高度成長から中成長へと大きく転換していく日本経済を、均衡の取れた安定成長に——いま中期経済計画では六%前後の成長を予測していますが——なめらかに定着させることです。これが私どもの仕事の一番の眼目でもあるわけです。

最近の経済状況をみますと、円高の関係や過去一、二年のいろいろな財政政策の成果で、物価も例年になく安定していますし、生産活動もポチポチ動き出している。在庫調整も進み、個人消費もだいぶ明るい見通

しになっています。今日の経済の状況は底固い推移を続けている、と考えてもいいかと思えます。

企業収益のほうも、減量経営をやってきた関係もありまして、だいぶ増益になって、収益も好転してきている、という状況です。いわば民間経済の底固め、まだひとり立ちが出来るところまで行っていないし、もしかしたらひとり歩きは出来ないかもしれないが、ひとり歩きをする素地づくりだけはどうかやら出来た、というのが今日の現状ではなからうかと思えます。

ただ今日、残された問題が大きくいつて三つあると思えます。その一つは、雇用の問題です。いま一つは国際収支、特に経常収支の黒字幅の縮小をどうするかという問題で、最後は財政の再建の問題です。

雇用問題にはキメ細かい対策で

昭和五三年度の雇用状況をみますと、新規の雇用が七五万くらいになるかと思えます。新規労働市場への参入者もだんだんとふえてきておりますので、雇用問題全般としては改善の遅れが目立ってきているわけです。

一部では思い切った財政刺激をやらなければ、なかなかこれからの雇用問題はかたづけられないぞ、とおっしゃる方もありますが、しかし雇用問題をかたづけけるのに財政で景気を刺激して押し上げてみたって、そんなに大きな効果が出るとは思いません。

今日、雇用問題として大きく取り上げなければいけないのは構造不況業種に従事している労働者の職業転換をどうするかとか、企業城下町の人たちの問題をどうするかということですが、同時に、これからだんだん大きな問題になってくるのが、中高年層の雇用対策です。こういった問題についての対策を立てるに当たっては、それぞれの状況に応じたキメ細かい対応が必要で、マクロの景気をよくしてもそれによって救済されるのはおのずから限度があるのではないでしうか。

国際収支、特に経常収支の黒字幅の問題ですが、ご承知のとおり、黒字を何とか早く圧縮しろ、ということが国際的に強く要請されています。

昨年の四月から一月の輸出入の状況をみますと、輸出数量は前年同期比較で三・六%の減です。逆に、輸入は同じ期間で七・八%増ということになっていきます。明らかに急激な黒字の減少傾向を示しています。この基調が三月までずっと続くとすると、五三年度全体の黒字幅は五二年の三兆五、〇〇〇億円から二兆七、〇〇〇億円、大体四分の一くらいは減るのではないだろうか、と考えています。

長期の資本収支も、発展途上国に対する援助を大々的に進めてきた関係もあって大幅な赤字となっており、基礎収支全体をみますと若干の赤字が出る、というような状況になっています。五四年度もいまのような

状況でいきますと、最近為替が安定したこともありすが、貿易収支で一兆四、〇〇〇億円くらいの黒、基礎収支で一兆二、〇〇〇億円くらいの赤になるのではないだろうか、と予測しています。

避けられない一般消費税の導入

第三の財政再建の問題ですが、ここ数年、民間経済の自立的回復を促進するため、財政は相当の無理をしています。そのためご承知のような大幅な赤字が出てきたわけです。新年度においては、国債依存度三九・六%、発行額で一五兆二、七〇〇億円というような額にならざるを得なかったわけです。この国債が後代の負担となり、財政の機能的な運営を阻害するだけでなく、うかうかするとインフレ発生の種をも蒔きかねないわけですから、新年度予算の編成にあたっては、財政再建のための歳出の合理化を極力進めたつもりです。

もちろん、国民のニーズが強く削れないものもあります。しかし、福祉対策の充実や公共サービス向上についても最終的にはやはり国民の負担に待たなければなりません。高度成長時代には、どんどんふえる自然増収を福祉や公共サービスに回すことができましたが、今日のような時代ではそれは困難です。自然増収を期待することは考えられませんが、やはり、国民の負担をお願いしなければいけなくなってしまうわけです。

一般消費税の導入も五五年度には、ということになっていますが、もちろんこうした大衆負担をお願いするためには何といっても国民の理解が先決です。同時に、歳出の合理化なり、税負担の公平化、特に租税特

別措置にあげられているようないろいろな特別措置の合理化をしっかりとやらなければならないことは当然です。今回の予算編成に当たっても、スクラップ・アンド・ビルド方式で、従来の経費に対する相当思い切った切り込みを行いました。それによって限られた財源の中での新規政策を予算化したわけです。

税制改正についても、いろいろ手を打ちましたので、財政健全化に取り組む政府の決意と姿勢がある程度ご理解いただけたのではないかと思います。

“ツケ”をしょいこんでの編成

こんどの予算編成で一番苦労したのは、先ほども触れたように、雇用の問題の改善や民間景気の回復のためには、今年もひとつ財政にひと汗かいてもらって、景気に刺激的な思い切った予算を組むべきだ、という強い意向が政府内はもちろん、経済界その他にもあった点です。財源の面でいえば、今年には戦後一番の苦しい時期に追い込まれています。従来はツケが全部今年に回ってきています。

税収のほうは最近ちょっとはよくなったのですが、去年の一二月頃は、五三年度予算の税収見積が赤になるのではないかと心配されるような状況でした。今年には五月分までの税収を前取りしているのです。新予算は六月から来年三月までの税収を見込むのですが、とても大きな自然増収を見込むわけにはいきません。まあせいぜい本年度並みというような状況です。

歳入がきゅうくつなときには大蔵省はこれまで特殊金融機関の積立金なんかを取り崩したこともありま

すような傾向がままあったわけですが、今度もまた、そういう玉手箱がどっかにあるのだから、それをすっきり吐き出してはどうか、という話もあったのですが、使いたくともそういうタネはすっかり使い果たしてしまつた、というような状況です。

かといって、国債はそう無制限に発行できるものではありません。ケインズ流の学者は民間に資金がダブついているのだから、もつともっと国債で吸収できるはずだというのですが、これにもおのずから限度があります。特に大量の国債発行に踏み切る際には、その心理的な影響もよく把握しなくてはなりません。ギリギリどこまで発行できるか、ということをよくよく突き詰めて考えないとなりません。

そういうような歳入面の見直しを行い、三八兆六、〇〇一億円の予算を組んだわけです。予算の性格として景気の維持回復と財政再建の両並びの予算をめざしたつもりですが、どっちつかずのボヤけた予算だ、ともいわれています。しかし、最近にない低い伸びの予算に抑え込むことができたことはひとつの成果だ、と私は思っています。

来年度のGNPの名目成長率が九・五、六%であるのに対して伸び率一二・六%くらいの財政規模の予算編成ですから、景気の維持回復にも相当努力しているということをご理解いただけるものと思います。

歳出に思い切ったアクセント

歳出面につきましても、相当思い切ったアクセントをつけたつもりでおります。

経常的経費と投資的経費の二つに分けていますが、経常的経費は国債費を除きますと前年度に比べて八・

六%のプラス程度です。中でも役所の生活費に当たる部門については、前年同額ということで抑え込みました。

一方、公共事業には相当重点を置きまして、前年対比プラス二%余の予算をつけました。そのほか雇用対策では、従来中高年層を雇っている企業に対しては

民報協の記者研修会

梅 本 昭

(東京放送ニュース部長)

二月十五、十六の二日間、日本記者クラブの宴会場で、民報協の第十七回記者研修会が開かれた。

民報協といっても、ご存じない方も多いと思う。二十年余り前、民放がラジオ中心に、細々と報道活動を始めていた頃、国会はじめ記者活動の場で、発言力を強めるため、報道の現場が一つになってつくった交渉団体のようなものといえようか。その後、民放の報道力の強化、テレビを中心とした地方局の系列化などにより、民報協の当初の使命は薄れていったが、系列を超えた人間交流の場としての意義は残された。そこで八年前に企画されたのが民放記者の総合的取材力向上のための研修会である。国会記者会館の会議室を会場に第一回の研修会が開かれたのが、四十六年の三月。意外に好評で、とりわけ若手記者の経験不足に悩むローカル局からの要望は

特別会計で助成をしているのですが、こんどは一般会計からも企業に助成をいたしましょう、というようないことで、新制度を設けました。これで一〇万人くらいは雇用増が出る、と労働省ではみております。また、定年延長の声が各方面に強く出ておりますが、こういった方面でも企業に奨励金を出しましょうということ

強かった。爾来年二回研修会は欠かさず開かれてきたが、参加者の増加によって会場の狭さが問題になってきた。安い費用で多勢が参加して貰いたいがつめこみ研修の批判はさけたいというジレンマがつづいた。

五十一年夏のプレスセンタービルの完成と日本記者クラブの移転は、まさに天来の福音であった。早速その秋の研修会から利用させて頂くことにした。今回で六回目になる。整った施設、行き届いたサービスだけでなく、ジャーナリズムの先輩達がかもしだすクラブの雰囲気は、若い記者にとってこの上ない刺激になっている。今回は講師にクラブの企画委員のサム・ジェームソン記者を迎えて、「外からみた日本のマスコミ」について話して頂いたが、好評であった。

現在日本記者クラブに民放は約五十社が加盟しているが、多数の地方局会員にとって、クラブの利用度は極めて低いのが現状のようだ。民報協の研修会が、これらの会員各社に少しでも加盟の意義を還元できるとすれば、それは、記者クラブの発展にも連なるものと考え、これからも春秋二回の研修会会場として大いに利用させて頂くつもりである。

です。これによって九万人くらいの雇用増をみております。このほか職業訓練に重点を置くとか、失業給付金を充実させるというような対応にも気を配ったつもりです。

住宅も相当思い切った額をふやしております。これは財投も含めて四兆四、〇〇〇億くらいになってますが、ご承知のとおり、もう戸数よりも住宅の質で勝負しなければいけない時代になってきているものですから、貸出し限度を引き上げる、などいろいろなることをやっております。

一般にちょっと誤解を招いているのは、社会保障や文教関係の問題です。今年はずごく圧縮してしまっただ、というように一部でいわれていますが、そうではありません。前年に対する予算の伸び率だけを見ると、社会保障関係は一二・五%のプラス、文教関係は一・六%のプラスにとどまっていますが、ご承知のように社会保障関係や教育関係の経費の中身は人件費と物件費が主として、賃金の大幅上昇がなく、物価も安定している点を考慮すると、中身においては相当充実したものだ、とご理解いただけたらと思います。

これからの日本の将来のことも考えて、発展途上国に対する援助三年間倍増、あるいは額としては大きなものではないかもしれませんが、核融合の研究などの原子力開発にも手は打ったつもりです。新エネルギーの開発、グリーン・エネルギーの開発等に対する研究費もある程度の手当てはできたものと考えます。予算全体の枠は相当縛ったものになりましたが、予算自体の中身は相当コンパクトになって、まあ中身で新年度は勝負しませう、というような気持ちで編成したというところがあります。

思います。

ホルバート（AP通信） けさの新聞では大蔵省の高官がアメリカでだぶ批判を受けて帰国したと報じられています。ブルメンソール長官などアメリカの高官のこうした対日姿勢を考えて、日本は政策を変える可能性がありますか。

答 たいへん難しい質問ですが、アメリカ側も円高のために外需が日本の成長の足を引っ張った、というよりは認めているわけです。成長率が問題ではなくて黒字減らし、外貨減らしをもっとしっかりやって国際協調の姿勢を示してほしい、ということだと思います。

先ほども説明しましたように経常収支はだんだんと減ってきていますし、いろいろな緊急輸入措置等も講じており、日本の努力はある程度わかってもらえるのではなからうか。もちろんいろいろな話があったから、予算編成の姿勢を変えるという気持ちはありませんし、もう変えようがないギリギリの努力をしている、ということです。

山谷（個人） 役所の生活費は前年並みという話がありました。私も民間企業の経営者と話をしますと、皆さん、政府は企業が儲かってきたというけど、実態は減量経営の結果出た収益だ、というわけです。それに比して役所のほうは前年並みの予算だ、なぜ役所は減量経営せんのか、という意見をぜひよく聞くわけです。

官民の感覚の相違ですね、これがいま日本の経済にいろいろなひずみとなって出ているのではないかと、思います。いかがでしょう。
理論的には今年も皆さんしょうがないとおつ

しゃっていますが、感覚的に「もう一つ満足しない」というのがいまの状況だろうと思います。

答 よくわかります。私もあちこち行って、これだけ企業も家計も減量経営をやってもらって、やっとなかもっているのだから、国でもその点は国民の皆さんに納得してもらおうような姿勢を取らないと、協力してもらえないよ、というようなことをいっているわけです。

機構改正も大きいところは出来ませんでした。地方支分局と、どんどん整備することを続けております。国鉄、林野等も定員減をどんどんやっております。

（文責・編集部）

おめでとうございます クラブ名誉会員の古谷綱正氏が本年度テレビ大賞特別賞を、同じく名誉会員の磯村尚徳氏がポーン賞をそれぞれ受賞されました。

お元気で活躍を アジア情勢が活発な展開をみせていますが、日経はアジア総局を新設、初代総局長として齊藤志郎会員（論説委員）が3月10日にシンガポールへ赴任の予定です。また、激動のテヘランへは共同の川本和孝会員（論説委員）が飛行便のメドがたち次第出発します。また、和田教美会員が韓国へ、米谷健一郎会員が中国へ取材旅行に出ます。

シャッター・チャンス/AP・三上記者

12ページの三上カメラマンの写真は、昨年3月26日（成田のコントロールタワーが襲撃された日）の午後1時30分頃、横堀鉄塔から四〇〇mの地点、15mの距離で、八〇ミリで撮影したものだ。

当日は非番なので取材腕草なし。周辺カバーと思えばらついているうち集会グループを発見。機動隊の配置から衝突地点を予測して、ピーナツ畑で待機すること3時間半。鉄塔の方で「煙」が立ったので、やきもきしていると、例のグループがやってくる。しかし、学生は無手勝流スタイル。ところがすぐ引き返した。そして、すぐにもどってきた。今度は手に手に火炎ビンと石。投石とリーダーの声。

ハシャッター・チャンス▽
弘前の高校を出て上京。銀座付近でボーイさんをしていたが、学歴不問に引かれてAP入り。イロハのイから写真はAPで教わったという。この作品も社が応募した。受賞にもたんたんとしていて「賞金50万円が多すぎて気持ちがいい」という。同社ではこの種のコンテストに入賞すると副賞と同額のボーナスがでる。

「カメラマンが写真を撮るのは当たり前なんだから」とどうにも賞金の多さが気になるらしい。カメラの性能が年々よくなっているの、何をどのように撮るかという着想、着眼がカメラマンの優劣を決めるといえる。同支局には現在三人のカメラマンとデスク一人。各自が自分の企画と予算をデスクに出して、それを中心に仕事が進くようになっていく。

78 世界報道写真最優秀賞 (A.P.三上貞幸カメラマン撮影) 関連記事11ページ



三月の行事

- 6日(火) 正午～午後2時 鈴木俊一氏昼食会
- 7日(水) 正午～午後2時 麻生良方氏昼食会
- 8日(木) 正午～午後2時 太田薫氏昼食会
- 9日(金) 正午～午後2時 クローセン・バンク
・オプ・アメリカ社長昼食会
午後2時30分～3時30分 国連ナミビ
ア理事会ミッション記者会見
- 15日(木) 午前11時～正午 塩崎潤自民党統一地
方選对本部事務局長記者会見
午後1時～2時 山口敏夫新自由クラ
ブ選対委員長記者会見
午後2時30分～3時30分 向井長年民
社党選対委員長記者会見
午後4時～5時 大野潔公明党選対委
員長記者会見
- 16日(金) 午後1時～2時 緋田吉郎共産党選対
委員長記者会見
午後2時30分～3時30分 宮之原貞光
社会党選対委員長記者会見
- 19日(月) 午前11時30分～午後1時 フォード前
米大統領昼食会